

## ■ 解答・解説

問1 (答) 少しお眠りになっていると。

「寝入り」は「眠り込む」、「たまへ」は尊敬の補助動詞「たまふ」(…なさる・お…になる)の已然形で、源氏に対する敬意。「る」は完了・存続の助動詞「り」の連体形、「に」は接続助詞(…ところ…と)。主語は光源氏なので、敬語をふまえて「お眠りになっていると」と訳します。

問2 (答)

- ・敬語の種類…尊敬語。光源氏に対する敬意(作者から源氏への敬意)。
  - ・「る」…完了・存続の助動詞「り」の連体形。ここでは存続(…ている)でとるとよい。
  - ・「に」…接続助詞。「…ところ…と」と、あとに続く内容へつなぐはたらき。
- 「寝入りたまへ・る・に」と分けて考えます。「たまへ」が補助動詞の尊敬、その下の「る」が助動詞「り」、最後の「に」が接続助詞です。

問3 (答) すばらしい・立派だ(心ひかれるほど美しい・申し分ない)。

「めでたし」は「すばらしい・立派だ」が基本義。ここは物の怪が源氏を「すばらしいとお見上げしているのに」と言う場面なので、源氏の美しさ・立派さをほめる意味で用いられています。

問4 (答) 謙譲語。作者から、(物の怪が「めでたし」と見申し上げている相手である)源氏への敬意。

「たてまつる」は「見る」に付いた謙譲の補助動詞で、「見申し上げる」の意。動作(見る)の受け手である源氏を高めています。会話文の中の言葉ですが、敬意の出どころは語り手(作者)と考えます。

問5 (答)

- ・基の語…「思ふ」。
  - ・「で」…打消の接続助詞(…ないで…ずに)。
- 「思はず」は「思ふ」の尊敬語で、ここは物の怪が源氏の心を高めて「お思いになる」と言っているもの。「尋ね思ほさで」で「(私を)尋ねてお思いにもならないで」となり、「で」は「…ないで」と打消を表します。

問6 (答) 「ことなることなき人」=夕顔(源氏が連れて来た女君)。現代語訳…格別なところもない/とりたてて優れたところもない。

物の怪の女が、源氏が連れて来た夕顔を見下して「格別でもない(つまらない)女」と言っている表現です。「ことなり」は「格別だ・特別だ」の意で、それを「なし」で打ち消しています。

問7 (答) 現代語訳…(夕顔を)連れていらっしやって。敬語の種類…尊敬語。

「率て」は「率る(ゐる)」で「連れて」、「おはす」は「来(く)」「行く」「あり」の尊敬語。ここは源氏が夕顔を連れて来たことを高めているので尊敬で、「お連れになって・連れていらっしやって」と訳します。

問8 (答) 主語=光源氏。「時めかす」=寵愛する・もてはやす(特別に大切にしてくawaiiがる)。

物の怪の女が「私を訪ねてもくださらず、こんな格別でもない女を連れて来てご寵愛なさるのは心外でつらい」と恨んでいる場面で、寵愛している主体は源氏です。

問9 (答)

- ・「めざまし」…心外だ・気にくわない(目をみはるほど意外で、不愉快だ)。

・嘆いているのは…枕元に現れた女（物の怪）。

「めざまし」はもともと「目が覚めるほど意外だ」で、よい意味にも悪い意味にも使いますが、ここは「(自分をさしおいて夕顔を寵愛するとは)心外で気に入くない」という不快の意。恨み言を述べているのは物の怪の女です。

---

**問10** (答)「かたはらの人」＝(源氏のかたわらに寝ている)夕顔。「む」＝意志の助動詞「む」の終止形。

物の怪が「この(源氏の)そばの人＝夕顔をかき起こそうとする」と源氏には見えた、という箇所です。

「かき起こさむとす」の「む」は、主体(物の怪)の意志を表します。

---

**問11** (答)この(源氏の)そばに寝ている人(夕顔)を揺り起こそうとする、と(源氏は夢うつつに)ご覧になる。

「かき起こす」は「揺り起こす」、「むとす」は「…ようとする」。最後の「見たまふ」は源氏が(半ば夢の中で)そう見た、ということです。

---

**問12** (答)受身の助動詞「る」の連体形。

「襲はる」は「襲ふ」＋受身の「る」で「襲われる」の意。下の「心地」に連なるので連体形「るる」になっています(何かに襲われるような気持ち、の意)。

---

**問13** (答)

・「おどろく」…目を覚ます・はっと気づく。

・「ば」…已然形＋「ば」で、順接の確定条件(…と…ところ)を表す。

「おどろきたまへ・れ・ば」で、「たまへ」は尊敬の補助動詞、「れ」は完了・存続「り」の已然形、「ば」は接続助詞。古文の「おどろく」は「びっくりする」だけでなく「目を覚ます」の意で頻出です。

---

**問14** (答)(廃院の中で源氏たちのそばにともしてあった)灯火。

「火」はここでは部屋の明かり＝灯火(ともしび)のこと。不気味な気配のなかで明かりまで消えてしまい、いっそう恐ろしさが増す場面です。

---

**問15** (答)文法説明＝「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、「けり」は過去(詠嘆)の助動詞「けり」の終止形。現代語訳＝(灯火も)消えてしまった。

連用形「に」＋「けり」は「…てしまった」と訳するのが基本。ナ変動詞などの活用語尾の「に」ではなく、ここは助動詞「ぬ」である点に注意します。

---

**問16** (答)

・「うたて」…いやだ・気味が悪い・不快だ。

・「る」…自発の助動詞「る」(自然と…される)。

「思さるれ」は「思す(＝思ふの尊敬)」＋自発の「る」の已然形で、「自然と(気味悪く)お思いになる」の意。「うたて思さるれば」で「気味悪くお思いになるので」となります。

---

**問17** (答)何かに襲われるような恐ろしい心地で目を覚ましたところ、灯火も消えていて気味悪く感じられたため、身を守り、また女房を起こすために太刀を抜いて手近に置いた。

突然の不気味な気配と暗闇のなか、源氏は護身のために太刀を抜き、それをそばに置いてから右近を起こそうとしています。武器を構えるほどの緊張・恐怖が読み取れます。

---

問18 (答) 動作主=光源氏。理由=何かに襲われるような恐ろしい心地で目を覚ましたところ、灯火も消えており、不気味で不安に思われたため、右近を起こして助けを求めようとした(明かりや人手を確保しようとした)から。

直前の「うたて思さるれば (=気味悪くお思いになるので)」が理由にあたります。

---

問19 (答) 「これ」=右近。もう一人、同じように恐ろしいと感じているのは=光源氏。

「これも」の「も」は「(源氏と同じく) この右近も」と並べる助詞。直前で源氏が「物に襲はるる心地」で恐れていることをふまえ、右近も同様に恐ろしがっている、と読みます。

---

問20 (答) 右近が、(源氏と同じように) 何が起きたのか分からず、たいそう恐ろしいと思っている様子。

「これも」の「これ」は右近を指し、「(源氏に劣らず) この右近も恐ろしいと思っている様子で、源氏のそばに近寄って来た」という流れです。不気味な気配のなか、女房の右近もおびえていることが読み取れます。

---

問21 (答) 謙譲語。動作主=右近。

「参り寄る」は「近寄る・参上する」の意で、「参る」は謙譲語。右近が(高貴な)源氏のそばへ近寄って来る動作を、その源氏を高めて表しています。

---

問22 (答) 「己」=枕元に立った女(物の怪)。読み=おの(「己が」で「おのが」。単独では「おのれ」とも)。

「己が」は「自分が」の意の一人称。ここは物の怪の女のせりふの中なので、「私が(あなたを)すばらしいと拝見しているのに」という意味になります。

---

問23 (答) ア・イ・ウ。

本文では、(ア)源氏が眠っている枕元に美しい女が現れて恨み言を述べ→(イ)源氏が目を覚ますと灯火が消えており→(ウ)源氏が右近を起こすと右近は恐ろしがりながら近寄って来た、という順で進みます。エの「夕顔がみずから起き上がって訴えた」は本文に書かれていません(夕顔は終始受け身で、のちに息絶えてしまいます)。

---

問24 (答) 作者=紫式部(むらさきしきぶ)。呼称=作り物語(つくりものがたり)。

『源氏物語』は平安時代中期に紫式部が著した長編物語。『竹取物語』などの流れをくむ、虚構を中心とした「作り物語」に分類され、『伊勢物語』のような和歌中心の「歌物語」と対比して整理されます。

---

問25 (答) 時代=平安時代(中期)。巻数=五十四(帖)。

『源氏物語』は平安時代中期(十一世紀初め)に紫式部が著した、全五十四帖の長編物語で、平安朝文学(王朝物語)の最高峰とされます。「夕顔」はその前半、光源氏(ひかるげんじ)の若き日を描く巻の一つです。

---